

国外調査（ポートランド）を振り返って

浜松市 中嶋 健二

2014年度週末学校の参加者らは、2014年8月23日から9月1日にかけてアメリカ、オレゴン州のポートランド市に国外調査へ赴いた。ポートランドは、日本と同じ夏でありながら、湿度が低く、30度を超えても日本ほどの暑さを感じない恵まれた気候の場所だった。朝夕に至っては、寒くて上着が欲しいくらいであった。現地スタッフの方々の甚大な支援のもと、飛行機が飛ばないという不運にも遭いながら、私達は無事一週間のプログラムを終えることが出来た。

○市内探索

空港についたその足で、PSUの寮にチェックインし、荷物を置くと、午後から市内探索の打ち合わせが行われた。FaceBook(以下FB)上で多少はどうするか議論していたが、実はそれ程進んでいなかった。サポートの方もバーンさん、サウミヤさん、愛さんと一新していた。その日も、翌日の朝も打ち合わせを行ったが矢張りあまり進まなかった。何処へ行くか、ということだけが決まっていた。バーンさんのアドバイスもあって、(質問は二つくらいしたら後は勝手に向こうが喋ってくれることが多い)私達はそこに甘えるしかなかった。一日どうするかがっちり決まっているグループに比べたら不安が多かったが、自然の成り行きに任せるしかなかった。

市内探索当日。ポートランドの空は私達を歓迎するように晴天だった。空の青が息を呑む様に青く、澄んでいた。自転車に跨ぐと、集合場所のアーバンプラザ前へ。そこからMAXで一路、メイウッドパーク市を目指す。メイウッドパーク市は、ポートランド市の中で唯一独立している市である。イタリアにあるバチカン市国のように、そこだけポートランド市から繰り抜かれている。人口僅か850人。自転車で一周するのに10分もかからない。とても小さな市である。私達がここを選んだ理由は、事前資料でメイウッドパーク市について知ることが出来たからだった。市を大きく跨ぐ格好で、高速道路の建設の話が持ち上がり、慎重に議論して高速道路を白紙に戻すことは出来なかったが、経路を大きく変えることが出来たという。私達はその過程に興味を抱き、現地の市民に話を訊いてみたかったのだった。しかし、高速道路が出来たのは、凡そ50年近く前であり、移住の頻繁であるアメリカでは知っている人は僅かかも知れないと事前にバーンさんから話を聞いていた。故に、一体どうなるのかと不安ではあった。あまり大したことは聞けず、観光のみで終わってしまったらどうしようという不安。

ところが、それが杞憂に終わってしまった。MAXの最寄り駅から自転車で市内へ向かう。閑静な住宅が並ぶメイウッドパーク市。日曜ということもあってか、あまり人も出ていない。しかし、日くつきの高速道路が目の前を走っており、猛スピードで沢山の車が行き交っていた。一番最初に声をかけた老夫婦は犬を散歩していたのだが、犬が自転車を怖がって吠える癖があるということで断られた。次に、道端で世間話をして二人の女性に声をかけた。ローズィさんという御婆さんだった。これが将に運命の出会いという奴だと私は思った。事前に打ち合わせしていたわけでも、何でも無いのに、彼女はずっと昔からここに住んでいて、高速道路の経緯もここがどういう市なのかも全て知っている老舗の御婆

さんだったのだ。私達が日本から来て、この市にとっても興味があって話を聞きに来たのだ
という、彼女は大変喜んで沢山のことを話してくれた。

それから時間にして凡そ一時間半！それだけの長い時間を私達のために割いてくれて沢
山の話聞かせて下さった。以下、ローズィさんの話で特に印象的だったものを記したい。

高速道路は何よりも騒音が困っているという。常時間こえるため、滝だと思って諦めて
いるという。(この表現もとてもセンスがあると私は思った)ただ、こうも仰っていた。メイ
ウッドパーク市は空港がすぐ傍であるが、飛行機の騒音は全くと言っていいほど無いと
言う。空港の北側に走る大きな側の上を通る様に必ず飛行機が離着陸してくれるため、水
面で騒音や振動を全て吸収してくれるのだという。その点はとても評価出来ると彼女は仰
っていた。

また、メイウッドパーク市の住民は自然(特に植物)をととても大切にしていた。日本と
は比べようもないくらい一件辺りの土地が広いのだが、芝生には必ず車は止めない。車を
止めていようものなら、譬え他人の土地であっても市長に電話して注意して貰うのだとい
う。市長が注意しに来てしまう点が、何ともおかしく、しかし小さな市ならではの利点の
ような気がした。条例で、12 cm以上の幹を持つ木は勝手に伐採することが出来ないように
自分たちで決めてしまった。また、少し場所を移動すると、別の女性が「自分の土地では
ないのだけれど」と言いながら、嬉しそうに街路樹の手入れをしていた。如何にも養分た
っぷりめの腐葉土を樹木の傍にかけていた。落ちた枯葉や朽ちた樹木は、必ず放置するの
ではなく、専門の業者のところへ運んで適切に処理して貰い、この様に再び腐葉土として
利用するのだという。私は疑問に思った。どうしてそこまで木を大切にするのだろうか。
そこで、ローズィさんの隣にいた可愛いコリーを二匹連れた女性に訊いてみた。「木はまず
木陰を作るわ。そうして動物の居場所になり、水を保水するの。とにかく、生き物にとっ
てとても重要な役割を担っているの」個人的な話になってしまうが、私は浜松市の大原浄
水場で浄化した水質検査をしていた。この週末学校を通して、水についての専門性を極め
たいと様々なことを調べていると、木(森)に行き着いた。詳細は避けるが、木の持つ役
割はとても大きい。あらゆる生命にとってとても重要な役割を担っているのが植物である。
そのことを恐らくではあるが、直観的に理解し、共有意識として持っていられるメイウッ
ドパーク市の方々が本当に素晴らしいなと感じた。



市内にはこのように大きな
木々が並ぶ。まるで森の中
にいるようだ。

ローズィさんが、隣にプロのカメラマンが住んでいて、もうすぐ帰ってくるから写真を撮って貰いなさいと薦めてくれた。時間が少しだけ空いたので、私達は数十メートル歩いた。その先には犬の水飲み場があった。隣には大きな木があり、そこには何故か電飾が散りばめられていた。これはクリスマスツリーなのだという。電飾はその為だった。年中つけっぱなしらしい。ただ、問題はそこではなかった。そこだけ道路に突き出すように、変な形をしていたのだ。

左の木がクリスマスツリー。横の歩道が道路に対して大きく湾曲しているのが分かる。



「こんなに閑静な住宅街なのに、ここをスピードを出して通る車が絶えなかったの。だから減速させるように、わざと道路に突き出しているのよ」ローズィさんは仰った。確かに、その日は日曜で車の数はとても少なかったが、皆そこで減速していた。安全のため、道路を変えてしまうなんて。本当に柔軟性の高い市であるなど、私は感じた。

それから暫くしてカメラマンの男性が訪れた。ローズィさんが理由を話すと、とても嬉しそうにカメラや三脚や脚立を取り出し、私達は犬の水飲み場の前で写真を撮っていただくこととなった。とても思い出深い写真となった。

気付けば、既に 12 時近くであった。午前中が全て過ぎ去ってしまった。けれど、本当に満足行くインタビューになった。まさか、偶然にもこんな出会いがあり、これ程素晴らしい時間を過ごせるとは予想もしなかった。私達はローズィさんたちに幾度もお礼を言ってメイウッドパーク市を發った。また是非、訪れてみたい場所の一つとなった。

○イノベーション・ラボ

8月27日の午後。私達は四つのグループに分かれて、日本とアメリカで共通する問題である「ごみ屋敷問題」について考えた。このグループワークで印象的だったのが、各グループには私達現役生のみではなく、PSUの教授や、その他様々なネイティブの方々がついて下さったことだ。私達のグループ3にはアーバン・グリーンチャーリーさんと、PSUの教授をされているブレントさんが加わってくださった。

議論は5つのステップに分かれて行われた。まず、ステップ1がグループで自己紹介を

行い、ごみ屋敷問題に対し従来の行政が慣行的にとる措置はどういったものであったかを討議した。各々、ごみ屋敷を実際に目にし、聞いたことがあるか、述べ合った。日本でもメディアでは盛んに取り上げられているが、私は個人的にごみ屋敷というものを目にすることがなかった。ただ、NHKの番組でそういった問題に取り組んでいる豊中市の女性を見たことがあった。彼女はごみ屋敷を解決するために活動しているのではなく、地域から孤立してしまう人々を救うために活動していた。つまり、根底的な問題はごみを貯め込んでしまうことではないということだった。話し合いを進めるにつれ、その意識は共有されていった。チャーリーさんも義理の母親が離婚を機に独りになりがちになり、気付いたらゴミを貯め込むようになってしまっていたという。

ステップ2として、ポストイットを利用し、考えられる限りのステークホルダーを列挙していった。沢山の意見が出された。行政に限らず、自治会であったり、近隣の住民であったり、逸早く異変を察知出来る例として、郵便の配達員や新聞の配達員があげられた。恐らくその人に関わる全てのものが、その人にとってのステークホルダーに成り得ると考えられた。提案されたステークホルダーを分類分けした。

ステップ3として、まとめられたステークホルダーを土台にして、ごみ屋敷問題の新しい解決策を模索した。ただし、注意点として・その解決策は相互のメリット、コミュニケーション、協働を促進するものであること。・ステップ1であげられた従来型の解決策とは根本的に異なるものであること。・ステークホルダーの関心、利害、ニーズに偏りが無く、バランスの取れた、一貫性を有するものであること。の3点が条件としてあげられた。また、西芝先生から重要なヒントを頂いた。それは、人口が1~1.5万人ほどの小さな市ではこの問題は殆ど発生しないということだった。大きな市と小さな市での相違点とは何か。それはやはりお互いを知っているか知らないかであると思われた。

ステップ4として、グループの討議内容・解決策の発表を行った。私達のグループは、それぞれのステークホルダーが、地域の住民を網の様に囲うことで決して孤立させることのないようにすることがあげられた。そのためには、行政のみならず自治会や近隣住民との密な連携が必要で、より一層の情報交換が求められるものと考えられた。

ステップ5として、グループを超えて質疑応答をすることで、この解決策、また、イノベーションとは一体何なのかということについて議論を深めた。

このイノベーション・ラボで印象的だったのは、日本とアメリカでは文化風習は違えど、現出する問題の根源的な部分は同じであるということだった。それは矢張り、私達は人間であり、であるが故に根本的に同じ悩みや辛さを抱えていることなのだなと感じた。

○感想

一週間のポートランドで得られた経験は上述したものには止まらない。ここには書き切れなかったが、非常に沢山のひとと出会い、日本とは全く異なる文化や建物、人々に触れることが出来た。非常に大きな刺激を受けた。そして、もっともっとポートランドについて知りたいと思った。ポートランドを知ることは、日本を知ることと同じなのだ。相対比較することで、気付かされる面は多大にある。ポートランドだけではない。私はもっともっと沢山の出来事、人々に目を向けて、地域で生きて行かなければと改めて思った。